

○第1日 1限 50周年記念<キックオフ>企画

言語研究のおもしろさ

西山 佑司(慶應義塾大学名誉教授)

[1] 東京言語研究所の50年を振り返って

1966年に開設された東京言語研究所は、今年度、開設50周年という大きな節目を迎える。この機会に、研究所としては、それを記念するいくつかの事業を企画し、実施する予定である。今回の春期講座は、この一連の50周年記念事業のキックオフとなるものである。そこで、本講義に入る前に、まず、東京言語研究所がこの50年間、どのような活動をしてきたか、その歩みを簡単にスライドで振り返ってみたい。そのあとで、今年度、予定している50周年記念企画事業の概要を紹介する。

[2] 文の意味構造に内在する目に見えない糸

言葉というものは、直接、物理的に観察できるようなものではない。それはサーカスのボールよりも小さい、人間の頭の中に、知識として納められているにすぎない。ところが、物理的にはこんなにちっぽけなものでありながら、その中身を科学的に解明しようとすると、その仕事は容易でないことに気づく。素手ではとても無理であり、相当の理論武装をする必要がある。そして、その中身に少しばかり、探りをいれてみただけでも、そこには目に見えないたくさんの糸が複雑に織りなしていることが分かり、驚嘆を禁じえないのである。今、一例として、(1)のような単純な文をとりあげてみよう。

(1) 花子(に)は夫がいる。

これは「所有文」と呼ばれているなんの変哲もない文であり、通常、《花子は結婚している》に近い読みを持つとされる。では、(1)の「夫」は誰を指すのであろうか。「花子の夫」に決まっているのではないか、と言われるかもしれない。本当だろうか。今、花子の夫を太郎としよう。その場合、(1)が真のとき、(2)も真と言えるであろうか。否である。

(2) 花子(に)は太郎がいる。

「夫」は、その語の意味からして「 α の夫」であることは間違いない。しかし、(1)においては、その変項 α を「花子」で埋めるわけにはいかない。もちろん、「正子」や「知子」など他の値で埋めるわけにもいかない。実は、(1)の「夫」は誰をも指していないのである。それにもかかわらず、(1)においては、 α と「花子」は、目に見えない固い糸で結ばれている。この糸の存在を明示的に述べることができる意味理論でなければ(1)の意味を捉えたことにはならない。しかし、さらにやっかいなことに、(1)には、(1)が真のとき、(2)も真と言える別の読みも存在するのである。次のコンテキストを考えよう。

(3) a. 甲: 花子が引っ越すそうだけど、手伝いにいなくてもいいのかな？

b. 乙: 大丈夫だよ。花子には夫がいるから。

(3b)の第2文にたいする自然な解釈は、《花子は結婚している》ではなく、《花子の引っ越しを手伝う人として花子の夫がいる》であろう。この読みの場合、(1)における「 α の夫」の α は「花子」で埋められているわけである。ということは、普通、気づかれないかもしれないが、実は、(1)の意味は曖昧なのである。

言語研究に限らず、一般に科学研究のおもしろさは、普通はその存在すら意識しない現象をひとたび意識し、その中身に科学のメスを入れてみると、そこに目に見えないたくさんの糸の存在を発見し、しかもそれらの糸が、神秘ともいべき美しい法則や原理に支配されていることに驚嘆することにあるといえよう。この驚嘆の喜びを皆さんと共有したいと思う。

○第1日 2限 入門 認知科学としての生成文法

大津 由紀雄(明海大学教授)

《生成文法には関心があるが敷居が高すぎる》とか、《生成文法はことばの生得性になぜあんなにこだわるのだろうか》とか、といった声をよく耳にします。この講義では認知科学(こころの科学)としての生成文法についてできるだけわかりやすく解説します。

この講義は理論言語学講座「生成文法Ⅰ(入門)」(今年度は今西典子氏が担当)への誘いとしての役割を果たすことも目的としています。

○第1日 2限 フィールド言語学入門

長屋 尚典(東京外国語大学講師)

フィールド言語学あるいはフィールドワークとは、広く定義すると「ある言語をその言語が話されている自然な環境で研究する方法」のことです。したがって、日本語母語話者がチェロキー語、ナワトル語、ミヘ語などのあまり一般には知られていない言語を研究するような場合だけでなく、英語やフランス語、日本語の方言、さらには自分の母語を研究する場合も含んだ言語研究の方法論を指します。この意味でのフィールド言語学は100年以上の歴史を持つ言語学で確立された方法論であると同時に、現在、言語学の世界でもっとも盛んに議論されている分野の一つです。アメリカの大学院では言語学者になるための必須のトレーニングの一つと考えられており、今年度私が担当する講座「言語類型論」の基礎ともなっています。

春期講座ではそのフィールド言語学の全体像の導入を行います。扱う主なテーマは、21世紀になって盛んに研究されているトピックを中心に、フィールドワークの定義、フィールドワークの目的、フィールドワークの歴史、フィールドワークの方法、フィールドワークの成果、記述言語学と言語ドキュメンテーション、研究倫理などです。

「母語以外の言語を研究してみたいがどうすればいいの?」「言語学者は世界の少数言語をどのように記述しているの?」「言語調査の苦勞は?」「少数言語を保存するには?」「図書館にある文書はどのように書かれたの?」「フィールドワークするためには何を勉強すればいいの?」「どんな本を読めばいいの?」春期講座では、そのような疑問に対する答えを探っていきたいと思います。

○第1日 3限 言語学入門

大堀 壽夫(東京大学教授)

ことばの研究にはさまざまな分野があります。私たちがことばと呼ぶものを作り上げる「単位」から見れば、音、語、文、そして談話という分け方ができます。また、「形(表現)」と「意味」という二つの面から見ることもできます。別の角度から見れば、ことばの歴史的な変化、子供の発達過程、社会的な変異、なども重要な研究対象です。日々の活動に、ことばが関わってこない人間集団はありません。この意味で、ことばの研究＝言語学は、人間の活動の重要な面に光を当てる作業と言えるでしょう。

この講義は二部構成となります。前半は言語研究のさまざまな分野——音声学、音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論など——のおおよその見取り図を、教科書的な例をまじえながら示します。後半は問題を一つに絞った上で、ある課題に対しての可能なアプローチを検討し、それを通じて「言語学における考え方」を例示したいと思います。具体的には、いわゆる再帰性(recursion)についての議論を見直します。この問題は、言語の起源と進化の議論において重要課題の一つとなってきました。ただし、本講義では「言語学とはこのような目標設定がされ、それはこのような学者によって提唱され、現在はこのような理論的課題が探求されている」というモノトーンな話のもっていき方ではなく、複数の解法を探ることになります。実際のデータを見ながら、具体性をともなった思考実験の面白さを感じることができればと思います。

○第1日 3限 語形成論 ～語の中の文法をさぐる～

杉岡 洋子(慶應義塾大学教授)

私たちは頭の中にある辞書から取り出した語を組み合わせて、文を作ります。その組み合わせ方がいわゆる「文法」ですが、実は言語の基本単位である語の中にも文法が潜んでいることがあります。語の中の文法はどのようなもので、文のレベルの文法とどんな共通点と相違点があるのでしょうか?

この講義では、理論言語学講座(前期)「語形成論」への導入として、この問いを手がかりに、動詞の補語の省略をめぐる日本語と英語の違いについてお話しします。一般に、日本語は補語を省略しやすく、英語は省略しにくいことが知られています。たとえば、壁の落書きの前で「ごめんなさい、ボクが書きました」と言えるのに、英語で **I wrote.* と目的語(「何を」)を省略して言うことはできず、*I wrote it.* と代名詞を使わなくてはなりません。これは日本人が英語を話すと

きに、うっかりしやすい点です。

ところが、この違いは文のレベルの話であって、語のレベルでは逆のパターンも観察できます。英語の *writer* は日本語では「もの書き」(＝ものを書く人)、また、行為をあらわす名詞の *knitting* に対して「編み物(をする)」というように、英語では他動詞の目的語が省略可能である場合も日本語では「もの」という目的語を入れる傾向があります。これは、文のレベルと語のレベルにおける名詞の性質の違いによって説明できるのですが(詳しくは講義で)、このように、文だけではなく複合語という語形成の現象をも含めて観察することで、日本語と英語が動詞の補語の義務性において興味深いコントラストを示すことが見えてきます。つまり、語の中の文法をさぐることは、言語そのものの基本的な性質に迫ることでもあるのです。

○第1日 4限 日本語文法研究入門

三宅 知宏(大阪大学准教授 2016年4月より)

①日本語文法に関して、一般言語学(言語理論)の基礎としての知識を得たい方、②日本語文法に関して、日本語教育を行う上での知識を得たい方、③日本語文法に関して、専門的な研究を進める上での知識を得たい方、④日本語、特に文法の分野に関して、知的興味を持っている方。

上の①～④のいずれかに該当する方を対象にして、日本語の文法について考える(研究を始める)ことの導入になるようなお話をさせていただこうと思います。「導入」などと言うと、少しかたいですが、要するに、日本語文法研究の“つかみ”ということです。

お話しすると言っても、一方的にこちらが話し続けるのではなく、具体的なデータに基づいて、一緒に考えながら、そして議論しながら、進めます。

受講にあたっての特別な知識は必要としません(もちろん、専門的な知識を既に持つ方の受講も拒みません)。また、日本語を母語としているかどうかも問いません。

日本語の文法について考えてみる(研究を始める)きっかけとなるような時間にしたいと思います。

○第1日 4限 文法原論

梶田 優(上智大学名誉教授)

言語に(1)先天的な側面と(2)後天的な側面があるということは疑いようがないのだけれども、では両者は厳密にはそれぞれどのようなもので、どのような関係で互いに結びついているのか、ということになると、いうまでもなく、一朝一夕に答えが出るような問題ではなく、理論言語学がこの問題を正面に据えてからでも、既に百年近くの時間が経過しています。そして途中から(ア)言語特有の性質と(イ)他の知的機能との関係の問題が絡まってきたこともあって、問題はいつそう複雑になっています。しかし研究は着実に進んでいて、数多くの新事実が次々に発見され、

それらを説明しようとする多様な試みがなされています。なかでも、理論言語学の成果をしっかり踏まえながら、これを脳科学の知見と結びつけて説明しようとする試みのなかに参考になるものが出始めています。今回の春期講座では A. Knott の提案を取り上げてその要点を説明し、これを動的・過程説的な文法観の視点から考えます。

2日目(4月17日・日)

○第2日 1限 認知言語学的に言語を楽しむ—

一つの事例: 認知言語学から言語類型論、言語の進化まで

池上 嘉彦(東京大学名誉教授)

<認知言語学>を専攻するとなれば、議論の対象となる問題についての熟知ばかりでなく、その分野の議論で用いられる専門的な用語や表記についても心得ておかななくてはならない。さもないと、その問題を共通の場として議論を進めることができないからである。ただし、それが最終的な目的であるというわけではない。専門的に自らをコミットするかどうかはこれからの問題として、とりあえず、言語の研究について特別の関心があるといった段階であれば、自らを強く束縛する特定の理論枠に捉われることなく、まず、自らの直観に従って言語と主体的につき合う—あるいは、戯れてみる—のはよいことであるし、後に自らが選ぶ方向の妥当性をより確かなものにしてくれるはずである。もし、そういうことであるならば、認知言語学の深い包容力と広い射程は間違いなく違和感なしに魅力的に感じられるに違いない。お話したいのは、そのような形で<認知言語学>と出会うことになるという一つの具体的な事例である。

話は、1972年の秋、日本ペン・クラブの主催で「日本文化研究国際会議」と題された大規模な会合が東京と京都で開催された折のこと—当時、京都大学名誉教授で中国古典文学と比較文学が専門の吉川幸次郎氏が「日本文学の特殊さ」というタイトルでの基調講演の中で『万葉集』のよく知られた山部赤人の和歌「和歌の浦に潮満ち来れば渦を無み葦辺を指して鶴鳴き渡る」をとりあげ、その英語訳に言及して「ここでの『鳴きわたる』が英語では go crying となっていますが、それだけでよろしいかどうか」(『会議録』より引用)と論じられ、それが特に理由を述べることもなく、断言的な調子でおっしゃられたことに戸惑いを感じると同時に、興味もかきたてられたことから始まる。

○第2日 1限 生成文法Ⅱ 言語の特徴とは、どんなものか？

高橋 将一(青山学院大学准教授)

言語は、音声や文字や手話といった媒体(以下、代表して音声のみに言及)を通して、ある意味を表現することができます。しかし、言語は、音声と意味を直接的に結びつけるようなシステムではないと考えられています。このことを示す一例として、言語の曖昧性を挙げるすることができます。例えば、John saw the man with the binoculars という文には、「ジョンが双眼鏡を持っている男性を見た」という意味と「ジョンが双眼鏡を使用して男性を見た」という意味があります。上記の英語の文が二つの意味を有するのは、その文に対して二つの構造、つまり表現の組み合わせ方が存在するからであると考えられています。よって、言語は、構造を介して音声と意味を結びつけるという特徴を持ったシステムであると考えられます。また、言語におけるこのような曖昧性の存在は、言語の機能に関して重要な手掛かりを与えてくれます。池内(2010)では、曖昧性は意思の伝達にとって有益に働くものではないため、「言語の中心的な機能はコミュニケーションである」という考え方に疑問を呈しています。また、同様のことを示すと思われる言語の特徴・現象は、他にも指摘されております。本講義では、これらの議論を概観し、言語はどのような特徴を有しているのかを考えていきます。特に、2016 度の理論言語学講座「生成文法Ⅱ」の講義の主要なトピックである who や what といった wh 疑問詞を使用した疑問文で観察される現象や言語間の違いに注目し、言語の特徴に対する理解を深めていきます。

池内正幸 (2010) 『ひとのことばの起源と進化』開拓社。

○第2日 2限 認知言語学Ⅰ 文法と意味

西村 義樹(東京大学教授)

準備中

○第2日 2限 日本語文法史 序説

川村 大(東京外国語大学教授)

日本語の歴史を学ぶことは、何も懐古趣味の持ち主(?)の興味を満たすためだけに必要なものではありません。現代日本語(だけ)を相手にする場合でさえ、すこし精密に見ようとすれば、否応なく古い日本語の名残にあちこちで直面することになります。

例えば現代語動詞・形容詞の「起きれ」「受けれ」「すれ」「来れ」「白けれ」などの「仮定形」(古文の文法で言う「已然形」)は、ふつういわゆる接続助詞の「ば」と一緒にしか使いませんし、「ば」もまた「仮定形」に接続する用法しか持ちません。ですから現代語研究や日本語教育の場では「仮定形+ば」を切り離さず、全体を一つの活用形と見て、「レバ形」と呼ぶのが普通です。しかし、私たちは「感謝されこそすれ、非難される筋合いはない」のような言い方をすることがし

ばしばあります。この場合の「すれ」はいったい何なのでしょう。これは言うまでもなく古代語の「こそ……已然形」の係り結び表現の名残です。係り結びは現代語では滅びたと言いますが、「ぞ」「なむ」「や」「か」の係り結びが遅くとも室町末期には口頭語から完全に姿を消していたのに対して、「こそ……已然形」の係り結びは、形骸化・定型表現化しながらも江戸時代以後もずっと使われ続けて、現代に至っています。

「こそ」の例は、まだ化石的に残った「慣用句」として処理すれば済む話かもしれませんが、現代語のあちこちに、もっと生産的に用いられる形式として古い日本語(平安時代のものとは限りませんが)が顔を出す場合があります。否定形式に「ない」の他に「ず(ぬ、ね)」があること、動詞述語の「う・よう」形のうち、「ます」を伴う場合のみ「ましよう」と拗音がはいること、等等。

この講義では、本講義の導入として、現代語文法に見られるそうした「古い日本語」をいくつか取り上げてみようと思います。

○第2日 3限 日本語文法の体内感覚

尾上 圭介(東京大学名誉教授)

一つの文法形式が場合によって大きく(あるいは微妙に)異なる複数の意味を表すことが多い。「9時になったか?」の「か」と「なんだ、まだ8時か」の「か」とは意味が違うが、微妙につながっているという直感が働く。「もう終わったか!」は意外性や安堵の表現でもありうるが、「なんだ、俺の屁か」は落胆の表現と呼びたくなる。「か」自身にそういう意味はあるのだろうか。「何かが見えている」「どうか助けて」の「か」はこれと大きく違うが、しかしあるつながりがありそうだ。

「バスもタクシーも来ない」の「も」と、「心配で夜も寝られない」の「も」と、「50人も集まった」の「も」と、「誰も知らない」の「も」と、「雨が降ってもやります」の「も」とは、表している意味が大きく異なるが、なにかあるつながりを感じる。

なにかある言語理論を適用したら、その文法形式の意味の多様性が簡単に説明できるというものではない。一つの文法形式が文に多様な意味をもたらす論理を解きほぐしていくところに、理論的な思索が始まる。上例で言えば「係助詞」というものへの注目が始まる。そのような文法カテゴリーが存在することの意義を問うところから、あるべき文法理論の構築が始まる。

一口に受身文といっても、その許容度には様々な段階がある。①「雨に降られた」は十分に言えるが、②「雷に落ちられた」は言いにくい。③「大雨で、(楽しみにしていた)桜に散られた」はある程度言えそうな気もするが、④「桜に咲かれた」は絶対に言えない。⑤「机が壊された」は翻訳口調の受身としてある程度許されるだろうが、⑥「机が叩かれた」は日本語でも中国語でもまらず言わない。このような許容度の微妙な差は、どうして生ずるのであろうか。これらの問題は、特定の言語理論を適用すれば説明が付くというようなものではない。多様な観点をそこに導入して重層的に思索を重ねていってこそ説明される。

「やる気(a)あるけど、体(b)ついて来ん」の(a)と(b)にはそれぞれハとガのいずれが入りうるだろうか。ありうる組み合わせの中でもっとも許容度の高いのはどれか。それは何故か。

こういう種類の面白さを、今年度は追及してみたい。

○第2日 3限 言語心理学

小野 創(津田塾大学准教授)

言語心理学(心理言語学)は、ヒトが言語を扱う能力をどのように得たのか(獲得、習得、発達、学習)という問題や、その能力をリアルタイムにどう使うのか(理解、産出)という問題を実験的手法を用いて解明する分野です。2016年度後期に私が担当する言語心理学Bの講義では、主に「文」を単位として調べられている文理解・文産出研究を紹介していくつもりですが、この春期講座では「語」について考えてみることにします。

母語話者は数万もの語彙・単語を扱うことができます。また非常に高速に単語を扱うことができます。私たちは知っている単語をすぐには忘れない(ことが多い)ので、それらの単語は長期記憶に保存されていることとなります。しかし、どのような整理のされ方でそれらの単語が保存されているのでしょうか。様々なトリックを使ったり、語彙の性質を利用すると、単語を呼び出してくる速度(知覚にかかる時間)をすこしだけ速くしたり遅くしたりすることができます。といっても、数十ミリ秒ですが。

この講義では、上で述べたいくつかのトリックなどを紹介するとともに、つい先日分析が終わったばかりの津田塾大学の学部生が実施したプロジェクトの成果を紹介します。このような成果を見て、心理言語学を身近に感じていただきたいと思います。

○第2日 4限 音声学 —音声の多様性—

齋藤 純男(東京学芸大学教授)

人間が言葉話をしているときに発する音を音声と言います。私たちは毎日その音声を使って暮らしていますが、日常生活でそれを意識することはほとんどないのではないのでしょうか。しかし、意識してよく眺めてみると、音声は非常に多様であると同時にそこに整然とした仕組みがあることが分かり、大変興味深いものです。

本講義では、音声はどのようにして作られるのか、人間が発することのできる音声にはどんなものがあるのか、世界の諸言語でどういう音声が使われているのか、などについて、いくつか実際の音声を聞きながら学習します。音声を記述するために広く世界で使われている記号(IPA: International Phonetic Alphabet)についても学びます。

○第2日 4限 言語哲学入門

酒井 智宏(早稲田大学准教授)

言語哲学は理論言語学の一部門ではありません。それなのにどうして言語哲学の講義が理論言語学講座の中に置かれ、「言語哲学入門」が春期講座の中に含まれているのでしょうか。

言語はさまざまな顔をもつ複雑な対象で、「言語を一般的に分析する」ことなどではできません。それは「リンゴを一般的に分析する」ことができないのと同じことです。リンゴが木から落ちるのを見て、「おいしそうなリンゴだ」と思うか、「真っ赤なリンゴだ」と思うか、「大きなリンゴだ」と思

うか、「禁断の果実だ」と思うか、「万有引力が働いている」と思うかは、その人の観点によるのであって、どれが正しくどれがまちがっているということではありません。これと同じで、言語へのアプローチにも、科学的なもの、社会学的なもの、政治学的なもの、法学的なもの、哲学的なもの、などなどがあり、これらのうち科学的なアプローチをとるのが理論言語学で、哲学的アプローチをとるのが言語哲学です。どちらがよりすぐれていると言ったことではなく、それぞれ観点（あるいは守備範囲）が異なっているわけです。

なるほど・・・いや、これでは「どうして理論言語学講座の『中』に言語哲学の講義が置かれているのか」という最初の問いに答えたことにはなりません。理論言語学とは別に言語哲学という分野があるのであれば、言語哲学は理論言語学講座の「外」に置かれるべきものです。そして実際、理論言語学の教科書ではそのように扱われています。

この講座では、この常識に反し、言語の科学的分析を深めていくと、どこかで科学の枠を越えて哲学の領域に侵入していかざるをえないということ、それゆえ「理論言語学と言語哲学では言語を分析する際の観点（あるいは守備範囲）が異なる」といったのんきな物言いではすまされないということを納得していただこうと思います。とりあげる題材は昨年度と異なるものにします。